



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3825号 2017.8.9 発行

涼感満点「氷Tシャツ」 パッケージを冷凍



岐阜新聞 2017年08月09日
デザインしたTシャツを着て、凍らせたパッケージを頬に当てる関係者=多治見市田代町、ライフスタイルシティー

暑い多治見のひんやりTシャツはいかがー。岐阜県多治見市田代町の障害者就労支援事業所「ライフスタイルシティー」が、凍らせたパッケージでオリジナルデザインTシャツを包んだ「氷Tシャツ」を発売した。「多治見だからこそこの商品。全国に発送したい」と同事業所は熱い期待を寄せる。

同事業所は障害者の就労や自立を目指しTシャツやランチョンマットなどのデザインを手掛ける。同市では2007年8月16日に当時の国内最高気温40・9度を観測。同事業所は「暑い多治見から全国につながる商品をつくろう」とクールな氷Tシャツを発案した。

Tシャツをプラスチックの筒に入れ、さらにパッケージとなる布の巾着袋で包み、パッケージ部分のみをぬらして凍らせている。

氷Tシャツは氷点下の状態で発送。凍ったパッケージから取り出したTシャツをすぐに着ると涼感満点。事業所の林信幸専務（53）は「パッケージで包まれ、開封するまで中身が見えない楽しさもあり、遊び心いっぱいの商品」とアピールする。送料込みで1着3500円（税込み）。9月末まで販売予定。デザインやサイズ、枚数も注文に応じる。問い合わせは同事業所、電話0572（44）8812。

義足、難病などの人にヘルプマーク配布...岐阜県



読売新聞 2017年08月09日
東海3県で初...見かけたら配慮、支援を
県が無料で配布しているヘルプマーク（県提供）

県は障害者や難病患者らでハンディキャップを抱えながら外見では支援が必要か判断が難しい人に向けて、「ヘルプマーク」を配布している。県障害福祉課によると、マークの配布は2012年に東京都で始まり、岐阜県で10都府県目。東海3県では初めてという。

ヘルプマークは、義足や人工関節を着用している人、難病患者ら支援が必要なことが見た目にはわからない人のために作られた。全国共通のデザインで、赤地に白抜き十字とハートマークがあしらわれている。裏面に連絡先などを記載できるシールを貼ることができる。妊婦であること

を示す「マタニティーマーク」のように身につけることで、周囲の人々に理解や手助けを求められるのが狙いだ。

同課によると、県内の障害者団体への調査で、マークの着用対象者は約1万4000人いるとみられる。同課は「ヘルプマークをつけた人を見かけたら、配慮をお願いします」と訴えている。ヘルプマークは、各市町村の障害福祉担当課や県障害福祉課などで無償配布する。家族や支援者が代理で受け取ることもできる。問い合わせは県障害福祉課（058・272・8309）。

急増の「放課後等デイサービス」 障害児の支援経験ある職員必要に /福岡

毎日新聞 2017年8月9日

障害のある子どもが放課後や休日を過ごす「放課後等デイサービス」を巡り、国は今年度から職員に障害児支援経験を求めるなど運営のための条件を厳格化した。2012年度の制度創設から5年。事業所数が3倍超に増える一方で、支援の質が問われるケースも目立つ。【青木絵美】

音楽に乗ってヒップホップダンスの練習をする子どもたち。北九州市八幡西区の放課後等デイサービス「あしたのつばさ」は、20年近く障害福祉の現場で働いてきた代表の針池栄治さん（45）が2年前に開設した。利用するのは知的障害や発達障害がある小学生から高校生まで。保育士や児童指導員らが一人一人の特性を見ながら運動やダンスを教えたり、学習の手助けをしたりして「学校でも家庭でもない第3の教育の場にしたい」と話す。

放課後等デイサービスは、一般の学童保育を利用しづらい障害児たちの居場所として急速に広がった

【異次元豪雨】（1）濁流津波のよう 脱出、救出…紙一重

西日本新聞 2017年08月05日



瞬く間に濁流があふれ返った道路＝7月5日午後5時26分、福岡県朝倉市杷木星丸
福岡県朝倉市杷木林田の集落。濁流が民家や倉庫などを押し流し、周辺は土砂に埋まったままだ＝4日午後1時58分（本社ヘリから）

山の谷間にある福岡県朝倉市杷木志波の道目木（どうめき）集落。7月5日午後5時すぎ、坂本貫二さん（80）と妻イツ子さん（78）はずぶぬれで飛び込んできた近所の坂本秀雄さん（60）に「逃げたほうがいい」と促され、家を出た。

道路には既に、茶色の水が勢いよく流れていた。「どこに逃ぐるか」。うろたえるうち、水かさは増していく。近くを流れる幅約3メートルの川には大木が流れていた。ドーン、ドーン。雷鳴に交じり、木が橋にぶつかる音が集落に響いていた。

真っ黒な雲から猛烈な雨が降り続く。近所の6人で集まり、山際を目指した。貫二さん夫妻は手をつなぎ、膝丈まで増した濁流に足を踏ん張りながら、隣家の車庫と倉庫の間に入り込んだ。そこを抜ければ、身を守れそうな斜面まで3メートル。だが、流れてきた洗濯機で出口をふさがれた。高さ1メートルを超える津波のような濁流が後ろから押し寄せてきたのは、そのときだった。



土砂でせき止められていた雨水が上流から一気に流れ込んできたともみられる。貫二さんは背後から足をすくわれ、イツ子さんは完全に流れにのみ込まれた。「もう死ぬる」。そう思ったとき、流された貫二さんは、先に斜面に着いていた秀雄さん親子に腕を引っ張り上げられた。固く手を握っていた妻も助かった。貫二さんは全身傷だらけ。妻は全身泥まみれだった。

後ろを付いてきていた坂本俊一さん（76）は倉庫付近にもたどり着けず、濁流の中に取り残されていた。「こっち、こっち」。叫び声に俊一さんは2回うなずき、その後、見えなくなった。遺体が見つかったのは1週間後だった。

九州北部を襲った豪雨から5日で1カ月。これまで経験したことのない“異次元豪雨”はどこでも起きうるような状況にある。当時を振り返りながら、課題を考えたい。

福岡県朝倉市杷木林田。赤谷川沿いに自宅を構える久保山朝満さん（64）は妻と、少し高い場所にある隣の親類宅に逃げ込んでいた。7月5日午後3時半ごろ、川からあふれ出た濁流が集落内を流れだしていた。それでも5年前の九州北部豪雨で無事だった隣家なら大丈夫だと思っていた。

バチーン。午後4時ごろ、玄関のガラス戸が割れ、濁流が流れ込んできた。「しもうた。今度は駄目かもしれん」。水かさは一気に増し、腰まで漬かった。「離れ離れで流されるくらいなら一緒に」。妻には目が届く所にいるよう指示した。どこまで水かさは増すのか。身動きはとれず、親類夫妻とともに待つしかなかった。

意外にも10分ほどで水かさは下がった。外を見て驚いた。赤谷川も集落もおびただしい砂に埋もれていた。濁流は畑や田んぼ、家々を押し流し、赤谷川から約30メートル離れた所に新しく大きな川ができていた。その流れに向け、水が引いていたのだ。

5日、市の対策本部だけで救援を求める287件の通報が殺到した。対策本部に詰めた職員らは経験したことのない雨を想像できず、一部の現場は混乱した。

午後6時前、市東部の松末（ますえ）地域コミュニティ協議会の事務所に避難していた住民ら約10人が、近くの松末小に移動を始めたとの情報が対策本部に入った。

松末小の脇には5年前に氾濫した乙石川が流れ、背後には山が迫る。電話を受けた本部側は「松末小は危ない。なぜ、とどまれという指示を無視するのか」「麓の避難所に移動を」と声を上げた。

だが、住民らは松末小を選んだ。無事に一夜を過ごした住民らは翌日、協議会事務所の半分が濁流で削り取られているのを目の当たりにする。対策本部が避難所への移送手段と考えたマイクロバスも道路寸断で使えなかった。

避難者の一人は「事務所前の道路を流れる水が尋常でなく、少しでも高台にある松末小の方がいいと思った」。結果的に住民の判断が正しかった。

対策本部が浸水や道路寸断を把握できない中、市内の19消防分団約870人は通報を受け、不明者の安否確認や救助に向かった。

「すまんが行ってくれんか」。5日午後7時すぎ、市消防団の山内明団長（54）は河辺義弘16分団長（42）ら7人に出動を命じた。

現場は同市宮野の八坂集落。住民十数人が孤立していた。途中、深さ1メートルほどの濁流があった。団員は「怖い」とためらったが、河辺分団長は「大丈夫。行ける」と励まし、消防車で突っ込んだ。集落にたどり着き、住民を救出。戻ってきた消防車のナンバープレートは濁流の水圧でぐにやりと曲がっていた。

団員は普段は会社員や公務員、自営業者。救出には成功したが、山内団長は出動命令が正しかったのか答えを出せずにいる。「イチかバチかだった」。万一のことが起きる恐れもあった。今回の豪雨で、大分県日田市では消防団員1人が犠牲となった。

住民も行政も消防団も、手探りの対応を迫られた未曾有の豪雨。危険は人々の目前に迫り、生死の分かれ目は紙一重だった。心構え、準備、判断、対策…。重い課題が突き付けられている。

【異次元豪雨】(2) 情報 届かなかった避難指示
 豪雨被害の通報が相次ぎ、福岡県朝倉市の市職員は対応に追われた＝7月5日夜、朝倉市災害対策本部

福岡県朝倉市役所別館に7月5日に設置された災害対策本部。雨漏りのために床は水浸しで、多くの職員ははだしで室内を動き回った。「避難指示を出さず」「避難所は準備できているのか」。市幹部の怒号が飛び交った。



雨の勢いは市の対応速度を上回っていた。市は地区ごとに順次避難指示を出し、午後7時10分、全域に拡大。朝倉市甘木の安部千富さん(41)

の自宅はその約4時間前、水路からあふれた水に囲まれていた。自宅は周囲より土地がやや低く、玄関の扉は水圧で開かなかった。119番しても「救助要請が多くて行けません。自力で避難を」。自宅に閉じ込められたまま一夜を過ごした。安部さんのような家は少なくなかった。

市は気象情報や住民の通報などから「総合的に判断」し、避難指示を出したという。だが、根拠の一つ、気象情報を出す気象台そのものが戸惑っていた。

福岡管区気象台は、猛烈な雨が降ったとして、午後1時28分から断続的に「記録的短時間大雨情報」を発表し、災害への警戒を呼び掛けた。横光雅種主任予報官らはこのころから、数十年に1度の雨として「特別警戒警報」を出すことも念頭に置いていた。

朝倉市周辺の上空では積乱雲が次々と発生し、帯状に連なる「線状降水帯」ができていた。線状降水帯によってどれだけ大雨が続くのか、今の技術では正確な予測は難しく、この時の判断は「線状降水帯は3時間もすれば消滅するか、移動するだろう」。地中にたまった雨の推定量も警報の発表基準を満たしていなかった。

しかし、線状降水帯は居座り続けた。「こんなこと異例だ」。横光主任予報官らは雨が続きと判断し、福岡県に大雨特別警報を出した。午後5時51分。午後3時ごろの大雨のピークは過ぎていた。

「命を守るための行動をとってください」。テレビのアナウンサーの呼び掛けは朝倉市黒川地区にある宮園集落には届かなかった。

朝倉市では午後3時ごろから停電が発生。山あいの宮園集落でもテレビはつかなかった。市内では、防災行政無線の屋外スピーカーの一部が不具合を起こし、避難指示などを伝える「コミュニティ放送」も一部で放送できなかった。

宮園集落の50代男性は夜、自宅に止めていた車に乗り込み、豪雨情報を伝えるラジオに耳を傾けた。だが、その音も雷鳴でかき消された。携帯電話も通じない。明るくなると、山肌が崩れ、集落を出入りする道は崩れ落ちていた。

この男性が、隣の北小路集落で女性ら3人が流されたことを知ったのは豪雨の2日後。「そこまでひどいのか」。男性は災害の再発を恐れ、集落の人たちを説得して回り、7日のうちに18人全員がヘリで地元を離れた。

「何かあれば避難しようと思っていたが、状況が分からないままだった」。危機を伝える情報をどうやって確実に届けるか、大きな課題が浮かび上がる。

【異次元豪雨】(3) 孤立 同時多発、対応できず

九州北部を襲った豪雨は道路を寸断し、福岡、大分両県で数十カ所が孤立した。豪雨災害で、これだけの規模で同時多発的に孤立が起きたことはほとんどなかった。

大分県日田市の小鹿田(おんた)集落は1週間孤立した。

「田舎だから米や野菜はある。一番困ったのは水」。地元自治会長の坂本均さん(63)

が振り返る。15世帯約30人が残された集落では、井戸水をくむ各家庭の電動ポンプが停電で動かなくなった。

風呂などにためていた水は調理や飲料で減った。集落では発電機で水をくみ上げたが、その燃料もわずか。極力水を使わないよう、坂本さんは米をとがず、ガスの火で炊いて食べた。「ぬか臭いけど仕方なか」。電気復旧までの3日間、庭の池の水で食器を洗い、風呂も洗濯も我慢した。

九州豪雨で孤立した小鹿田集落で、河川の水があふれた高さを示す住民の男性＝7月28日、大分県日田市



孤立した福岡県東峰村の岩屋地区では、岩屋公園管理棟に二十数人が身を寄せた。周囲を流れるのは茶色く濁った水。近くの湧き水で住民は救われた。ホースで引いて飲用にし、食材を持ち寄ったり防護ネットでシカを捕まえたりして、道路が通じるまでの3日間をしのいだ。

特に孤立集落が多かったのは、山の上にある東峰村だった。5地区で最大252世帯706人が身動きがとれなくなった。

役場は孤立集落の同時多発に対応できなかった。7月5日の夕方から電気も電話も止まり、夜には携帯電話も不通に。職員は約50人。濁流のため庁外に出られず、役場そのものが孤立した。孤立集落がどれだけあるのか、到底把握できない。村職員は「どうしようもなかった」と振り返った。

雨が落ち着いても二次災害の恐れがあり、職員は容易に孤立集落へ近づけなかった。6日から入った自衛隊などによって徐々に道は開けたが、村全体の孤立解消まで5日かかった。

東峰村の山あいにある福井地区と村の中心部を結ぶ道は豪雨による土砂崩れで一時、通行禁止となった。車1台がようやく通れるようになった道は赤茶けた土砂にまみれ、流木や石が散乱する。道路沿いには、スギが傾いた急斜面が迫る。

復旧した道はまだ危険で、豪雨に耐えた道路も周囲の地盤が緩んでいる。村のハザードマップでは、多くの道路の脇が「土砂災害警戒区域」の黄色に染まっており、その周辺にはさらに危険な赤の区域が点在する。谷あいの道路はおろか、山側の迂回路（うかいろ）まで寸断されて孤立を経験した住民らは、再びの豪雨や台風におびえる。

対策はあるのか。東峰村のある職員は率直に言う。「災害を防ごうと山を切り開こうにも、財源に乏しい。現時点では、災害が起きそうな場合、3日分ぐらいの食料を自分で準備し、早めに避難所に来てもらおうしかない」。避難所に食料などを備蓄する「公助」に加え、住民の「自助」が不可欠だと強く訴えた。



【異次元豪雨】(4) 流木 「凶器」防ぐ決め手なく

西日本新聞 2017年08月08日
無数の流木と土砂に襲われた集落。復旧はなかなか進まない
＝7月27日、福岡県朝倉市杷木寒水

「異次元豪雨」は流木がその被害を拡大させた。推計総量21万立方メートル。福岡ヤフオクドーム（福岡市）のグラウンドに敷き詰めれば18メートルもの高さになる大量の樹木が斜面ごと崩れ、土砂とともに流れ下った。

福岡県朝倉市杷木寒水（そうず）。7月5日夜、寒水川近くの女性は窓越しに、橋に流木が積み上がっている異様な光景を目にした。別の男性は「流木は

複数の橋で建物の1階くらいの高さになっていた」という。

せき止められた川は一気にあふれ、流木は「凶器」と化して集落を襲った。

夫と自宅の庭に出ていた塚本潔子さん（69）は突然の濁流にのまれた。とっさに庭木にしがみついたが、夫は流された。救助された潔子さんは自宅脇の小屋に避難した。

翌朝。長さ10メートルもの流木が何本も小屋の土台ブロックを突き破っていた。「思い出すのも恐ろしい。夫が助かったのがせめてもの救い」と振り返る。

被災地には、濁流で樹皮と枝がそぎ落とされ丸太のような流木が今も横たわる。ほとんどはスギなどの人工林だ。

大分県日田市森林組合は市内約30カ所の土砂崩れ現場を調べた。倒木は6割が推定樹齢40年以上。被害箇所は3割は最近5年以内に間伐もされ、保水力は高かったという。

同組合参事の和田正明さん（57）は豪雨の翌日、現地で大量に立ち上る白い蒸気を目撃した。「雨はしっかりと吸収されていた。緑のダムの限界をはるかに超えた異常な雨量だった」とみる。だとすればー。

国策で進められた植林により、人工林に覆われた急斜面は日本中にある。流木被害はどこで起きてもおかしくない。

治山・治水対策で被害を防ぐことはできないのか。

朝倉市の寺内ダムは今回、流木1万立方メートルを食い止める機能を果たした。ただ、水資源機構の担当者は「流木がさらに多ければ放流口に引っかかり、放流に影響を及ぼす恐れもあった」と明かす。

水をため込んで下流域を守るダムは同時に、巨大なリスクもため込む。もし決壊すれば、膨大なダム湖の水が大洪水を引き起こす。

それを想起させたのが、流量に耐えきれず決壊した同市山田の「山の神ため池」。そばに住む久保山正清さん（60）は「流木の塊が池から襲ってきた。民家は一瞬で跡形もなくなったらしい」。集落では3人が犠牲になった。

砂防ダムが流木を防いだケースも一部にあった。だが福岡県内の整備率は4月現在で18%にとどまる。整備費は1カ所当たり2億～5億円で、県砂防課は「全集落を守るには100年以上かかるかもしれない」。

九州大の小松利光名誉教授（防災工学）は「今回の豪雨は流木の脅威を見せつけた。これを防ぐのは困難だということを前提に、避難のあり方などソフト面の減災に防災施策の重点を移すべきだ」と訴える

【異次元豪雨】（5）共助 「個」の弱さ補う地域力 西日本新聞 2017年08月09日



宮園集落では、川の水位が民家の真下に迫ったのを見て、自治委員らが避難を呼び掛けた＝7月28日、大分県中津市耶馬溪町

福岡県東峰村の室井保子さん（86）は村役場から徒歩5分ほどの自宅に1人暮らし。あの日、猛烈に降り続いた雨は午後2時すぎ、小康状態になった。そこに民生委員を務める近所の男性が訪れる。

男性は「おばちゃん逃げないけんよ」とせかした。ミシンで縫い物をしていた室井さんは「行かなくちゃいけませんかねえ」と渋った。それでも「高齢の1人暮らしだから」と強く説得され、自宅を後にした。

2日後の7月7日。避難所から歩いて帰った室井さんは自宅周辺の光景に目を疑った。路肩は崩れ、そばのJR大行司駅は駅舎に土砂が流れ込み、ペしゃんこに。「あの時、避難しなかったら…」。恐ろしさがこみ上げてきた。

「このくらいの雨なら大丈夫」「もう年だし」「避難所では眠れん」ー。危険が迫っても

避難しようとしなない人の存在は、災害のたびに指摘されてきた。

今回の犠牲者にも、逃げるよう促されたが動かず、自宅とともに土砂にのみ込まれた人がいる。結果的に助けられず、痛恨の思いを抱える人も少なくない。

「人には物事をいいように解釈する性質がある。人間ドックで引っ掛かっても再検査しない人が多いのと同じです」。地域防災に詳しい滝本浩一・山口大大学院准教授はこう指摘する。人が危険を認めようとしなないのは、精神の安定を保つため。心理学で「正常化の偏見」と呼ばれる。

この克服には「周囲の声掛け」が有効だ。「人間ドックの再検査も家族や周囲に説得されると行く。防災も共助が自助を促す」と滝本准教授は説く。

東峰村の室井さんを救ったのも「共助」だった。村は一昨年、避難が困難な要援護者をリストアップし、一緒に逃げる人を決めていた。男性が室井さん宅を訪ねたのもそのためだった。

実践例はほかにもある。氾濫した花月川沿いの大分県日田市吹上町は、定年退職者や個人事業主などを支援員とし、高齢者や障害者などに割り振っていた。今回、約60人の要援護者全員を避難させ、人的被害を出さなかった。

同県中津市耶馬溪町の宮園集落では、自治委員らが低地や水路近くに暮らす人から順に連絡し、公民館長が車で高齢者を移送した。いずれも2012年の九州北部豪雨を教訓に、きめ細かな備えをしていた。

ただ、地域防災力の維持は「風化」との闘いだ。

14年に77人の犠牲者を出した広島土砂災害。広島市の八木ヶ丘町は災害後、集会所に設置した雨量計の数値に基づき、避難を促す仕組みを整えた。だが避難者は徐々に減り、最近では3人のことも。町内会の宮上清澄会長は言う。「人は数年で忘れるし、慣れる」

「異次元豪雨」から1カ月がたち、九州は本格的な台風シーズンを迎えた。個人の弱さを克服し、自分たちの命を守るため、地域ぐるみで手だてを講じる時だ。

「人生100年時代構想会議」立ち上げへ

日テレニュース 2017年8月8日

政府は安倍改造内閣の目玉政策と位置づける「人づくり革命」を推進するため、「人生100年時代構想会議」を立ち上げると発表した。

これは茂木経済再生相が会見で明らかにしたもので、「人生100年時代構想会議」は有識者によって構成され、事務局には内閣府や文部科学省、厚生労働省などから約30人の職員を集めたという。

茂木経済再生相は、「従来の発想にとらわれず大胆な改革を進め、さまざまな分野で制度の見直しを進める。誰もが人生を再設計できる社会をつくる」と強調した。

具体的には、学び直しをすることで中高年の人たちに多様な雇用の機会を設けたり、社会保障分野では高齢者を中心とした給付から全世代型に変えたりするなど幅広い分野について議論される見通し。

【第3次改造内閣】厚労副大臣に高木、牧原両氏 - 政務官には田畑氏と大沼氏

薬事日報 2017年8月9日

第3次安倍第3次改造内閣の発足に伴い、副大臣と政務官の人事が7日の閣議で決定した。厚生労働副大臣に、元経済産業大臣政務官の高木美智代衆議院議員（公明）と、元自民党国会対策委員会副委員長の牧原秀樹衆議院議員を充て、政務官には、田畑裕明衆議院議員（自民）と大沼みずほ参議院議員（自民）を起用した。

副大臣、政務官に就任した4氏は、同日の初登庁後に会見した。

主に医療・介護・子育て支援の分野を担当する高木副大臣は、「厚労行政は広く国民に関わること」とした上で、「少子高齢化の進展など、社会保障制度を取り巻く状況が変化して

いる中、国民が生涯にわたって安心して生活できるように取り組みたい」とした。

音のない世界、疑似体験 静けさの中で「対話」

朝日新聞 2017年8月7日

手で影絵を作り、様々な形を表現する参加者たち＝東京都渋谷区、葛谷晋吾撮影



音のない世界を疑似体験し、言葉に頼らずコミュニケーションを楽しむ「ダイアログ・イン・サイレンス」が東京都渋谷区の「ルミネ ゼロ」で開催されている。日本では初開催で、20日まで。

参加者は音を遮断するヘッドセットを装着。聴覚障害のある案内人に率いられ、顔の表情やボディランゲージのみで「対話」する。1998年にドイツで始まり、世界6カ国で100万人以上が体験した。

会場には七つの部屋があり、異なる体験ができる。「手のダンス」では参加者が影絵で様々な形や物を表現。「顔のギャラリー」では表情のみで「喜び」や「怒り」などの気持ちを表し、「形と手」では箱の中身を身ぶり手ぶりで伝え合う。

総合プロデューサーの志村真介さんは「単なる聴覚障害の疑似体験ではなく、言葉の壁を越えた人とのつながりを感じてほしい。東京五輪・パラリンピックに向け、多くの外国人が日本を訪れている中、この体験は外国語が話せなくてもコミュニケーションをスムーズにしてくれるはず」と話す。

1回約90分。参加費は一般4千円、大学生3千円、小中高生2千円。問い合わせは080・4160・3103（午前10時～午後9時）。（葛谷晋吾）

「赤ちゃん、泣いてもいいよ」 ステッカーで子育て応援 産経新聞 2017年8月9日



「WEラブ赤ちゃんプロジェクト」のステッカー



(記事省略)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行